

# 西ドイツにおける価値形態論研究

## —— 1970年代の論争とその帰趨——

坂 口 明 義

### I. 序——論争の背景と概略

1970年代を通じて、西ドイツにおいて『資本論』研究が一定の活性化をみせた。これはこの時期、旧来からの「論理的—歴史的」解釈と並んで、「論理的」解釈と呼ばれる『資本論』解釈の新しい流れが形成されたことによって<sup>(1)</sup>。このときの方法論的対立は次のようなものである。つまり、『資本論』冒頭の商品—貨幣—資本というカテゴリー系列の性格<sup>(2)</sup>について、これを歴史的過程の論理的反映とみなす従来の「論理的—歴史的」解釈を排して、「論理的」解釈は、それが商品の使用価値と価値との矛盾からの一貫した自己展開（すなわち弁証法的展開）としてなされるべきことを主張したのである。「論理的」解釈のこの主張は特に、価値形態論解釈の中で提出されたのであり、また、それをめぐる議論も価値形態論解釈をめぐってたたかわされることになる。この時期の西ドイツにおける『資本論』をめぐる議論はまさに価値形態論争を中心とするのであり、そしてそれは内容的には「論理的」解釈の提示した弁証法的方法の解釈をめぐる論争として展開される<sup>(3)</sup>。本稿はその経過を整理し紹介することを目的とするものである。価値形態論と弁証法の関係はいかなるものか、マルクスの弁証法的叙述の独自性はどこにあるか、こうした問題を探る上で本論争を辿ることは非常に興味深い。その意義は最後に総括する。まず論争の概略を示しておこう。

論争は「論理的」解釈による解釈の提示とそれへの批判という形で進行する（本稿では、「論理的」解釈がその登場時に行った「論理的—歴史的」解釈への批判は取り上げない）。「論理的」解釈が追求するものは、商品から貨幣への展開の弁証法的展開としての論述であり、その際弁証法的展開はカテゴリーの自己運動であるかのように把握される（これは「内在的自己超越」という言葉で

性格づけられる)。だが、既に我が国の議論において明らかにされているように、『資本論』の価値形態展開をもそのような弁証法的展開として規定してしまうことは困難である。<sup>(4)</sup>そこで「論理的」解釈内部で、価値形態論の解釈をめぐって、それをいかにして弁証法的展開として規定するかが論議の的となる。我々は、Ⅱで代表的論者たるバックハウス、ライヒェルト、プロイエクトグループ「マルクス体系の展開」（以下PEMと略）を取り上げてその様相をみていく。論争の第二ラウンドは、「論理的」解釈に対する批判の展開である。我々はそれをⅢでみよう。提出される批判点は大きく二つに要約される。第一は、価値形態展開を上のような弁証法的展開として規定することの非妥当性を批判したものである。第二は、「論理的」解釈の用語法にしばしばみられる観念論的傾向への批判であり、これは弁証法的展開による経済的カテゴリー本質の基礎づけというマルクス独自の理論タイプの合理的部分をいかに取り出すかを問うものである。こうした批判に対する「論理的」解釈の応答はバックハウスによってなされる（Ⅲ、3）。彼は批判を深刻に受け取り「論理的」解釈の方法理解に自ら反省を促す。しかし彼自身は上の批判点を克服する解釈を提出しえない。こうして「論理的」解釈の行き詰まりが帰結する。我々は1970年代の論争を、「論理的」解釈の試みの展開とその行き詰まりとして要約する。

では、これを打開する方途はどこにあるか。我々はそのような一つの試みとしてⅣで、ゲーラーの解釈を取り上げる。彼は『経済学批判』（以下『批判』と略）の交換過程論における貨幣導出においてはともかく、『資本論』の価値形態論および交換過程論での貨幣導出においては、もはや商品の矛盾の自己展開としての弁証法的展開はみられないと解し、特に『資本論』の価値形態展開にみられる理論タイプを「発生的再構成」と名づけその内容規定を試み、これをマルクス弁証法の合理的部分として把握する。「論理的」解釈が、マルクスの著作においては一貫してカテゴリーの自己運動的な弁証法が適用されているとみなしたのに対し、ゲーラーは、『批判』から『資本論』に至る段階においてマルクスの弁証法的方法には決定的な変更が生じたとみなすのである。この解釈枠組における差異が価値形態論の理論タイプを規定しうるかどうかを決することになる。

## II. 「論理的」解釈

### 1. 問題意識と解釈枠組

価値形態論をめぐる「論理的」解釈内部の議論をみる前に、「論理的」解釈の議論の方向を規定したバックハウス〔6〕（1969）を中心に、彼らの問題意識および解釈上の共通の前提をフォローしておこう。

まず「論理的」解釈が解釈作業を進めていく際の枠組を定めたのが、バックハウス、ライヒェルトというフランクフルト学派に属する論者であったことは偶然ではない。この点については二点を指摘しよう。第一に、彼らが、従来同学派においてはマルクスがブルジョア社会の批判の基礎とみなした経済学批判に未着手であったことを欠陥として捉え、その方法を獲得すべくマルクスの著作の研究に乗り出したということがある。<sup>(5)</sup>第二は、同学派において『経済学批判要綱』（以下『要綱』と略）研究の深化がみられたことである。<sup>(6)</sup>既にロスドルスキーは〔20〕（1968）の序文で、『要綱』の出版が、マルクスの経済学批判における弁証法的方法を無視しようとする従来の傾向を終焉させるであろうことを予測していたが、以下でみるような「論理的」解釈における弁証法的方法の重視はまさにこの『要綱』の馴致と裏腹なのである。

第一の点は、「論理的」解釈の枠組を定めたバックハウスがそもそも価値形態論を取り上げて議論を進めた文脈を示している。彼は価値形態論の意義を物神性論との関連で説明している。彼の解するところ、価値とは、マルクスが『資本論』第一章第一節において明らかにしているように、交換価値の根底にあって、分析によってのみ把握されるものである。「生産物の価値は思惟されたものとして生産物そのものから区別される。」（〔6〕S. 135）そしてこのような「思考物」（〔6〕S. 144）がその現象形態（すなわち価値形態）においては、「意識に対して疎遠なものとして対置されている」（〔6〕S. 135）ところに彼は、「転倒」をみい出す。だが、バックハウスによれば、このように社会的関係が人々に対して独立しているという（物象的関係の）事実には既に初期マルクスによって記述されているのであり、ブルジョア経済学批判がなさなければならないのはむしろその発生の追跡によるその構造の解明を通じた物神性の秘密の暴露にあるという。そしてここでの物象の関係は価値表現としては商品と貨幣の関係であるということから、バックハウスは、貨幣の発生の追跡を課題とする価値形態論を物神性の秘密解読の場として重視するのである。

では、価値形態論のそのような意義はどのような仕方で達成されているか、バックハウスはそれをマルクスの弁証法的方法にみい出す。彼は、貨幣ないし商品―貨幣関係の構造は、商品の矛盾からの自己運動の結果としてそれを導出することによって明らかにされると考えるのである。『資本論』の価値論の理解の仕方について彼は次のように説明する。「価値論が適切に解釈されるのは、商品が『内在的自己超越 (immanentes über-sich-Hinausgehen)』の過程において自己を貨幣として定立するというようにとらえられる場合においてである」(〔6〕S. 133)。この「内在的自己超越」という性格づけは以後の「論理的」解釈の論者が共通に採用するものであるが、その内容の十分な探求はなされずその点が批判を蒙ることになる(次章参照)。それはともかく、「内在的自己超越」とは顔面通りに受け取るかぎり、一カテゴリー(ここでは商品)が自己内部の矛盾による運動の中で、その矛盾を解決するものとしての別のカテゴリー(貨幣)を生みだしていく(自己を超え出ていく)というやり方での移行の達成であると考えられるし、またそうした説明方法が「論理的」解釈の追求するところとなる。

さて重要なのは、こうした志向がマルクス自身にもみられるということである。例えば、『資本論』初版の、「使用価値と交換価値との直接的な統一としての……商品の内在的な矛盾——この矛盾は、それが商品と貨幣とへの商品の二重化という形をとるまでは、休みも止まりもしない」(〔3〕S. 48)という文言は、貨幣が商品の矛盾による自己運動の結果として得られることを述べている。マルクスのこの志向から価値形態論を解釈していこうというのが「論理的」解釈の追求するところなのである。その際特徴的なのは、マルクスの諸テキストの叙述に関する以下のような独特な想定である。まず彼らは、『要綱』から『資本論』に至るマルクスの諸著作にみられるカテゴリー展開の基底には、上のような「内在的自己超越」の弁証法が存在すると考える。そしてそれを引きだそうとするのが彼らの解釈作業の内容となる。<sup>(7)</sup>だがバックハウスによれば、その際に、『資本論』に関しては、断片的に上の引用のようにカテゴリー展開の弁証法的な進行を指示する文言がみられるだけで、その叙述がマルクスの「通俗化」の意図から上のような進行の仕方を不明瞭にしているということが考慮されねばならないという(〔6〕S. 129 f.)。以上の理解は後にバックハウスが「二層モデル」として明快に説明している(〔7〕S. 19 f.)。つまり、『資

本論』の叙述はその表面を歴史的説明の導入など通俗化のための表層が履っており、深層にあるカテゴリーの弁証法的連関は直接には把握することができない。ではこの深層はいかにして抽出することができるのかというと、既に『要綱』『批判』の叙述がこれを与えている——このように説明されるのである。『資本論』を完成された叙述とみなすのではなく、むしろ『要綱』『批判』といったそれ以前の著作を重要視するところに「論理的」解釈の独自性がある。これは弁証法的方法の重視とあいまっている。

## 2. 「論理的」解釈による価値形態論解釈

以上の枠組（弁証法的方法に関する「内在的自己超越」という規定と『資本論』に関する「二層モデル」）に則った価値形態論解釈はいかなるものであるか、我々は「論理的」解釈の代表的論者たるバックハウス、ライヒェルト、PEMからそれをみていく。周知のように価値形態論における貨幣（ないし一般的等価物）導出は『資本論』段階において初めてみられるようになったのであるが、「論理的」解釈においては『要綱』『批判』が『資本論』の基底にひそむ「深層」とみなされるのだから、価値形態展開を「内在的自己超越」として規定していこうとするならばそこには固有の困難が生じてくる。「論理的」解釈内部の価値形態論解釈をめぐる議論は、価値形態展開をもいかにして「内在的自己超越」の弁証法として規定するべきか、この点をめぐる探究としてなされる。

まずバックハウス〔6〕（1969）の価値形態論解釈だが、彼の場合にはそもそも『資本論』において確立してきた価値形態展開の帰結として貨幣を導出するという観点が全くみられない。

彼はまず価格形態「20エレのリンネル = x グラムの金」を取り上げて、そこには「金を最初に貨幣にするところの商品の価値は、商品においてもつ金の観念的な量、つまり交換価値あるいは価格としてしかあらわれない」（〔6〕S. 145 f.）という転倒（先述）がみられるとし、この転倒の暴露に価値形態論の課題をみい出す。したがって彼の場合、リンネルの価値が金使用価値において現象するというのを把握することが重要となる。これは次のようにして説明される。すなわち、使用価値としてのリンネルはあくまでリンネルであって金ではないが、価値としてはリンネルは金に等しく、したがって「価値としては

リンネルは金である」(〔6〕S. 142)と、この等式が把握されればよいのである。バックハウスによれば、この事態はマルクスにおいては「二重化」——商品の商品と貨幣とへの二重化——という弁証法的運動を示す術語によって適切に表現されているという。

これに対し、ライヒェルト〔18〕(1970)は、『資本論』段階で成立してきた価値形態展開を射程に入れ、それを「内在的自己超越」の弁証法に組込むとする。彼は、商品の貨幣との現実の交換（これは「現実的二重化」と呼ばれる）が問題となる交換過程論に対して、価値形態論では、商品所有者による価値表現（これは「観念的二重化」と呼ばれる）が取り扱われ、ここでは「価値はどのようにして価値として現象するか」(〔18〕S. 156)という問いが問題になるとする。ライヒェルトは先のバックハウスのようにこの問いに直接に価格形態を結びつけることはせず、まず、その解答として、生産者間の生産物交換においては、生産物は価値として関係させられており（「客体的等置」と呼ばれる）、その結果として「一方の使用価値が、抽象的人間労働の直接的物質化(Materiatur)」すなわち「他方の商品の価値の現象形態」(〔18〕S. 158)となるのだということをいう。その上で次の問い、すなわち、「価値形態が価値概念の一般性に対応しているかどうか」(ebd.)が引き継ぐ。この問いに答えるものとして価値形態展開が位置づけられる。つまり、『資本論』の価値形態論でなされている「欠陥」規定による移行を、彼は「価値の一般性とその現象の不十分な形態との間の」矛盾による進行と解する。これは「概念と定在の不一致」に価値形態の移行の動力をみい出す見田氏等の解釈に類似しているのだが、注意すべきは、ライヒェルトの場合、その矛盾と交換過程論において扱われる矛盾との相違が全く明らかにされないままなのであり、その説明の仕方は価値形態展開に素朴に「内在的自己超越」という図式を当てはめようとした結果とみなされうることである。

バックハウス、ライヒェルトに続いて一連の論稿が現れるが、その中で注目すべきなのはPEM〔16〕(1973)である。この著作は詳細なテキスト比較に基づいて、上のバックハウス、ライヒェルト等の解釈を批判しあるいは補おうとしただけではない。Ⅲで紹介する「論理的一歴史的」解釈からの「論理的」解釈への批判は直接にはPEMに対してなされるのであり、論争上重要な意味をもつのである。彼らの積極説はその際に取り上げることとしここではバック

ハウス、ライヒェルトへの批判をみておこう。

バックハウスへの批判は価値形態展開無視と関連している。PEMによれば、「社会的労働の一定の支出形態の対象的反映の展開による誤った外観の骨化と、転倒した社会関係の最終的な貨幣への骨化」([16] S. 190)とを区別しないと、貨幣物神の基礎が商品物神にあり、したがって貨幣形態の基礎となる転倒は単純な価値形態において明らかにされねばならないということがみ失われるという。

ライヒェルトに対しては、彼の、単純な価値形態において既に使用価値と価値との外的対立が表されているということの等閑視を批判する。PEMはこの原因を、ライヒェルトがバックハウスから「思考物」というその価値概念を引き継いだことにみい出す。そしてこの価値理解では、一商品の価値が自らの使用価値から区別され現れなければならないという要求が把握されず、商品の内的対立から外的対立への移行が説かれえないという。PEMが対置するのは、商品の価値はその商品に支出された労働の反映であるということであり、これは社会的関係ないし商品生産労働の形態規定性としての価値と呼ばれる。この価値がその商品の使用価値には表されえないということが上の要求の基礎となるとPEMは解する。その際マルクスの次の文言が挙げられる。「リンネルの生産においては一定量の間労働力が支出されている。リンネルの価値は、こうして支出されている労働の単に対象的な反射なのであるが、しかし、その価値はリンネルの物体において反射されているのではない。」([3] S. 17)

バックハウスおよびライヒェルトへの批判にみられる限りでのPEMの志向は、価値形態展開をも「内在的自己超越」の弁証法として規定するというものであるが、特に後者への批判にみられたように、それは商品の内的矛盾の契機たる価値を「思考物」としてでなくあくまで客体的な関係と把握する点で、商品の自己運動（それは当然客体的なものである）による展開という志向を徹底するものである。我々はここに価値形態論解釈に「論理的」解釈の枠組が貫かれた一応の到達点をみることができる。

### Ⅲ. 「論理的」解釈への批判

#### 1. 「論理的一歴史的」解釈の側からの批判

「論理的」解釈の強調したのはカテゴリー展開における弁証法的方法の重要

性であったが、このことはカテゴリー展開を歴史的発展過程の論理的反映とみなす「論理的・一歴史的」解釈との対立を内包するものであった。しかし「論理的・一歴史的」解釈の側は「論理的」解釈に対し無視の態度を取り続けた。その中唯一の応答がホルツカンプ〔13〕（1974）によってなされる。これは直接にはPEM（およびその指導者のビショフ）<sup>(8)</sup>に対する批判であるが、その含む問題提起は「論理的」解釈の枠組そのものの是非を問う重要なものである。

ホルツカンプによるPEM（ビショフ）への批判は多岐に亘るが、我々はそこから価値形態論解釈に関する部分をみていくことにする。論点は価値形態展開の必然性の性格づけにあるが、ホルツカンプがこのことを問題とする視角をまず簡単に示そう。彼の解するところ、マルクスが自らの方法を「論理的」と形容するときには、それは単なる形式論理的整合性の満足のことを述べておらず、むしろ、「マルクスの方法の特殊性、すなわち通常の意味の形式論理的なもの以上のものかつそれ以外のもの」（〔13〕S. 24）の要求を表しているという。ここから彼は以下の問題提起を行う。「マルクスの分析の特色としての“論理的なもの”はいかにして性格づけるべきか」（ebd.）。この観点から彼はPEM（ビショフ）による価値形態展開の性格づけを問題にするのである。

前章でみたライヒェルトへの批判において、PEMは商品の使用価値と価値の対立を外的に表そうとする要求を強調していた。詳らかではないが、PEMはこれを商品の内的矛盾として捉え、価値形態展開の動力とみなしているように思われる。PEMによる価値形態展開の性格づけは、「その成果が一般的等価物であるところの、単純な価値形態の内的矛盾から必然的論理的展開が生ずる」（〔16〕S. 176、傍点引用者）というものである。

この把握は、価値形態展開を、「内在的自己超越」に基づく歩みとして規定した結果である。だが果たしてこれは妥当だろうか。ホルツカンプが問うのはこの点である。彼は、PEM（ビショフ）が「展開」と「導出」、「形態発展」と「形態分析」を等置していることから、上の引用文中の「展開」とは思考上の展開を意味するものと論定した（〔13〕S. 26）上で、そこに付されている「必然的」「論理的」という概念の意味内容を問題にする。具体的には、「なぜ、単純な価値形態の内的矛盾に“論理的必然性”をもって、一般的価値形態を生み出すところの思考の発展が継ぎ足されるのか、なぜ貨幣が論理的必然的に商品の規定から導出しうるのか」（〔13〕S. 27、傍点原文斜字体）というのである。

この点について唯一PEM（ビショフ）にみられる視点は、しかし、「ブルジョア社会の絶えず生成する結果としての貨幣の発生（Genesis）の論理的導出」（〔16〕S. 177）というものにすぎない。ホルツカンプはこの性格づけを不合理だとみなす。つまり、「今そしてここにおいて，“単純な価値形態”が繰り返し現れ、その次にそこから（一種の目前の発生として）“不断に”展開された価値形態および一般的価値形態が展開されると主張するのは全く無意味だ」（〔13〕S. 32，傍点原文斜字体）というのである。

ホルツカンプは、このような困難が「論理的」解釈における歴史的説明の排除に起因すると考えて、自説を次のように対置する。すなわち彼は、価値形態展開を、「その歴史的生成の段階の一定の性質をもった再構成による貨幣形態の本質の科学的基礎づけ」（〔13〕S. 30 f.，傍点原文斜字体）というように、現実の歴史的過程の反映として捉える。そして価値形態展開の系列が必然的である理由は、貨幣形態が既に生成してしまっている歴史的段階から振り返ったときに、「総じてすべての先行段階が、ブルジョア社会へと（その都度研究されている関係の中で）到達したところの、別々に生じた諸段階の発展必然的な系列」（〔13〕S. 35）とみなされることに求められる。

ホルツカンプの解釈は旧来の「論理的-歴史的」解釈を一步も出るものではないが、彼による批判は、価値形態展開をも「内在的自己超越」として性格づけようとする「論理的」解釈の困難を露呈させるものである。本章の最後にみるバックハウスによる「論理的」解釈の自己批判は主にこの論点をめぐるものである。

## 2. 「新観念論」的傾向への批判

ホルツカンプによる批判は主に、「論理的」解釈のいう「内在的自己超越」の弁証法が価値形態展開には妥当しないことに向けられていた。それにとどまらず、「論理的」解釈の諸論者がマルクスの弁証法的方法ないし弁証法的叙述を性格づけるために用いた説明——それはしばしば「矛盾」「二重化」「内在的自己超越」等の術語を用いてなされていた——それ自体の不適切さも問題にされるようになる。そのようなものとしてリッツァート〔19〕（1973）、ルーベン〔21〕（1977）による批判<sup>（9）</sup>がある。

〔一〕「論理的」解釈における、「内在的自己超越」という規定によるマルク

スの弁証法的展開の性格づけは、リッツァートによって、「新観念論」的なものとして特徴づけられ批判にさらされる。彼によれば、弁証法的な理論体系に基礎づけを与えるためには、「論理的」解釈などにおいてしばしばみられる「弁証法のみせかけをもたらす習慣 (schein dialektische Übungen)」(〔19〕S. 97)は有害であり、これは退けられるべきであるという。特に彼がその一つとして挙げるのが、「商品」を“胚”細胞に比する隠喩法(〔19〕S. 13)であり、これは「現実の社会体系のあらゆる経験的諸規定を、“商品”のようなカテゴリーからの“展開”(Entfaltung)によって引き出す」(〔19〕S. 100)という「新観念論」に道を開くものであるとされる。<sup>(10)</sup>

このように「新観念論」的な説明の仕方を排した上で、リッツァートは、以下の諸概念によっていい表されているものの合理的な内容を析出するという作業を重要だとみなす。その諸概念とは、(1)形態と内容、(2)差異における同一性、(3)制限と自己超越(〔19〕S. 108, 番号は本稿筆者)であり、彼はこれらの意味内容が価値形態論理解にとって重要であるとみなすのである。(1)(2)は価値形態と価値実体、価値表現の両極に関わる概念であるので、ここでは「論理的」解釈の弱点たる価値形態の移行に関わる(3)に関するリッツァートの理解をみておこう。

リッツァートも「論理的」解釈と同様、価値形態展開を「自己超越」による必然的な歩みとして規定しようとする(〔19〕S. 118)。しかし彼の場合それは矛盾に基づく自己運動を意味していない。彼は価値形態展開の必然性を、体系的なものと歴史的なものの二通りに規定する。まず価値形態展開はその前後の理論部分を含めた体系の一部としてその位置づけが与えられねばならない。「単純な価値形態から、一步一步、原初等式が価格形態および貨幣形態を越えて、資本概念に至りうるためには、価値の本質、貨幣の資本への移行が理解されねばならない」(ebd.)、と説明される。しかしリッツァートによれば、これだけでは価値形態の「欠陥」を、ヘーゲル論理学(周知のようにそこでは、「限界」が「制限」として示されることは或る物が自分自身を越えることである)でいうところの「制限」として示すには不十分であり、さらに「前資本主義的交換形態に基づく現実の実践の“欠陥”」(ebd.)といった歴史的・具体的契機が必要であるという。<sup>(11)</sup>

リッツァートにおいては、歴史的過程と体系的展開との関連等が明確にされ

ておらず、そのため彼の見解をただちに「論理的・歴史的」解釈としてしまうことはできない。しかし、価値形態展開の必然性について、もはやそれを（非歴史的という意味での）論理的必然性のみでは規定しえないとする点において、同じように「自己超越」という言葉で価値形態展開を把握しようとする「論理的」解釈とは決定的に異なるのである。

〔二〕同じく「論理的」解釈における説明の不合理さを衝いたものにルーベンによる批判がある。彼の矛先は「論理的」解釈における価値とその現象に関する説明の仕方に向けられている。価値の理解について「論理的」解釈内部に対立があることは既に前章でみたが、ルーベンはその両者を批判する。バックハウス、ライヒェルトにおいては価値は思考物と把握され、それが「二重化」という運動の結果価格形態として現象するものとされていた。だがルーベンによれば、思考物が運動の主体として登場するような説明の仕方は「思弁的構成の古い神秘主義」（〔21〕S. 47）であるという。他方、ライヒェルトへの批判の中で提示されたPEMの解釈は、単純な価値形態において使用価値と価値の外的対立が既に表されていることを強調し、そこにおける商品生産労働の単なる形態規定性としての価値を概念として採用するものであった（先述）。しかし、単純な価値形態への到達の仕方がPEMにおいては次のように説明される。すなわち、「現象している価格形態を抽象することによってのみ、単純な価値形態すなわち“貨幣の即自”を得ることができよう。この表面に現れない単純な関係に戻ることが貨幣の謎のヴェールを剥ぐことを可能にするであろう」（〔21〕S. 36、傍点引用者）というのである。ルーベンが批判するのは、この抽象手続きの不明確さである。つまり価格形態 a 商品  $A = x$  金からの抽象によって得られるのは、商品Aが価格という同一性を有するということではないのだから、価値概念を得るためにはさらなる説明が必要であるというのである（〔21〕S. 48）。

では「論理的」解釈がいずれの側も難点をもつのはなぜか。ルーベンはその理由を、「価値はそのものとしては現象しない」（〔21〕S. 48）とする彼ら共通の理解に求める。「論理的」解釈においては、そのような価値が直接ではなく間接的に価格形態においてのみ現象する点に商品生産社会の「転倒」がみてとられるのであり、価格形態が価値の転倒した表現であるということは価値から価格形態への移行によって証明されるものとされた。だが、ルーベンのみ

るところこの移行は本来不可能であり、にもかかわらずそれを行おうとするとここに「論理的」解釈の困難が生じてくるという訳である(彼は「論理的」解釈の上のような説明を「形而上学的説明」と呼ぶ)。では、ルーベンがこの移行について十分な説明を与えているかということではなく、単純な価値表現が自然現象にも通じる「弁証法的矛盾」の統一の一般的モデルであることを強調するに留まるのである。彼はまず価値を「対象化された社会的労働力能すなわち社会的に利用可能な労働生産物に移転された人類のエネルギー」(〔21〕 S. 26)であるとする。そしてマルクスが重量表現 $k_1 = mk_2$  (物体 $k_1$ と $k_2$ の量的同一性の関係)との類推で説明していることを挙げながら、価値表現 $w_1 = w_2$ における $w_1$ の経済的価値と $k_1$ の重量とは別の属性であることを注意しつつも、両表現において「二重化」の関係、すなわちルーベンによれば「その外化した現象様式における種的規定性〔商品においては使用価値、物体においては物体そのもの……引用者〕と類的規定性〔商品においては価値、物体においては重量……引用者〕の具体的統一」(〔21〕 S. 59)が存在するというのである。価値形態展開はこのような弁証法的矛盾の解決の一般的方法であるとされるが、ではそれが具体的にはどのようにしてかということそれは説明を与えられずじまいである (ebd.)。

〔三〕以上我々が見てきたリッツァートとルーベンによる「論理的」解釈への批判は、いずれにせよ、マルクスの弁証法的方法に関する彼らの説明の不明確さを衝くものであった。「論理的」解釈はしばしばマルクスがヘーゲルから引き継いだと思われる概念を明確な規定なしで無批判的に用い、あるいは不明瞭な比喻を用いた。このようなやり方に頼るならば、マルクスの弁証法的方法の独自性・意義を(特に他の立場の論者に対して納得可能なように)明確に規定できないだろう。その意味で以上の批判に応えることは、マルクスの弁証法的展開を掘り出そうという試みを続行する上で「論理的」解釈の避けて通ることのできないものである。

### 3. バックハウスによる「論理的」解釈の自己批判

以上の批判の中で「論理的」解釈に突きつけられたものは、第一に『資本論』の価値形態展開に「内在的自己超越」という弁証法的展開の規定を妥当させようとするものの困難の指摘、第二に弁証法的方法によるカテゴリー展開をより

明確に規定することへの要求、として要約できよう。「論理的」解釈の論者の中でこれに率直に応えようとしたのは、バックハウス〔7〕（1978）である。彼の論点は主に第一の点をめぐるものである。

歴史的事実の導入を不必要としてこれを排し（非歴史的という意味での）「論理的」な説明の可能性を追求してきた「論理的」解釈に対し、「論理的一歴史的」解釈の立場に立つホルツカンプが価値形態展開の必然性はそれが歴史的過程の反映であると解釈してのみ説明しうることを対置したことは既にみた。いまや価値形態展開についてバックハウスもまたそれが「論理的一歴史的」性格をもつことを認めるのである。まずマルクス自身が以下の部分において「論理的一歴史的」説明を行っていることを彼は指摘する。すなわち、「この形態（形態Ⅰ……引用者）が実際にはっきりと現れるのは、ただ、労働生産物が偶然的な時折りの交換によって商品にされるような最初の時期だけのことである」、「展開された価値形態がはじめて実際に現れるのは、ある労働生産物、たとえば家畜がもはや例外的にではなくすでに慣習的にいろいろな他の商品と交換されるようになったときのことであり」（〔4〕S. 80）という文節である。バックハウスはこれに付言して、「貨幣の展開の四つの段階のうちの少なくとも一つ、すなわち一般的価値形態が疑う余地なく＜論理的一歴史的＞性格をもつ、なぜなら「この形態の経験的相関物は、資本主義以前の社会にのみ存在し、＜歴史的論述＞はここでは＜論理的＞構成の契機であって単なる例示ではない」（〔7〕S. 45）という。この故に、マルクスの経済学批判の方法を一義的に「論理的」と規定することは、マルクスの論述の一定部分のみを絶対化する教条主義に陥るものであり、「論理的」解釈の試みは反省を迫られる、という。

ではバックハウスがこのことをもって「論理的一歴史的」解釈を認めてしまったのかというとそうではない。彼は「論理的一歴史的」解釈は相変わらず問題を抱えているとみなす。その指摘するところを整理するならば次のようになる。

第一に、『要綱』から引き続き用いられている「全面を覆う主体」「過程を進行しつつある主体」「媒介する運動」「二重化」等、自己運動を指示するような概念の存在をどう解釈するか。第二に、価値形態展開が実在の歴史的発展過程からの抽象であるとすれば、それは旧石器時代から新石器時代に至る（B. C. 7000～3000）歴史的過程の反映とみなすという不合理に陥る、という歴史的

実の問題。第三に、貨幣ないし価値形態の本質の解明に「論理的—歴史的」方法は役立たないという問題である。バックハウスによれば、マルクスが解こうとしていた貨幣の本質の問題は「>貨幣<と呼ばれている様々な流通手段すべての相互の関係に関する問題」(〔7〕S. 56)であり、この背後には同一の価値論をもちながら貨幣論においては著しい対立をみせていたリカード主義者の矛盾を解決しようとする意図があったという。つまり、バックハウスのみどころ貨幣の本質の問題とはあくまで「論理的」に解かれるべき問題なのである。そして問題の解決についてバックハウスは、マルクス自身歴史的<sup>(12)</sup>分析を要求していなかったし実際それは不用であるとみなす。

こうしてバックハウスはマルクスのテキスト中に「論理的」解釈があてはまる部分と「論理的—歴史的」解釈があてはまる部分とが同時に存在するという事実を確認した上で、やはり「論理的」解釈に固執するのであるが、だがそのためには、価値形態展開をいかにして弁証法的な展開として位置づけ規定するかという問題が解決されねばならない。バックハウスもこの問題を取り扱い諸説を検討に付すのであるが、しかし、そこからは次のことを確認するに留まってしまう。すなわち、すべての解釈者は、「マルクスの論証連関は公理—演繹的方法としても、歴史的理型<sup>(13)</sup>の系列としても表しえない」(〔7〕S. 100)という点では一致しているということ、そして、「ある一定の方向性と構造化(Stukturisierung)とがマルクスの論証連関に固有のものであり、それには準—論理的必然性とともいうべきものが妥当する」(〔7〕S. 102)ということである。では、ここでの「準—論理的必然性」とは何か、それは「内在的自己超越」の弁証法といかなる関係をもつのか、そうした点についてバックハウスはポジティブな内容規定を与えてはいない。

結局バックハウスは問題の解決を提示することなく、「論理的」解釈に対する第二の批判点をも考慮してなされた次のような一連の二者択一の羅列をもって考察をおえてしまう。これは「論理的」解釈が直面している問題のリストとしてよいであろう。

「1. >論理的展開<の構造に議論の余地がある。『資本論』の論証連関を自己展開する>胚細胞<の追跡行為として理解するか、あるいはこのやり方を>新観念論<として拒絶するか、どちらに意義があるか、という問いがここでは問題である。2. >論理的展開<の対象に議論の余地がある。資本主義以前

の категория が問題なのか、それとも資本主義的 categoria が問題なのか。

3. この準一論理的展開の可能性の条件に議論の余地がある。弁証法的 categoria の生成と妥当性をどう理解すべきか。それとともに、経験的・特殊歴史的な諸事実と準一超越的・弁証法的思考形状との関係に関する問題がある。」（〔7〕 S. 102）

#### IV. ゲーラーの「弁証法の縮減」テーゼ

「論理的」解釈の試みの追求——それへの批判——バックハウスによる不十分な応答という論争経過の帰結は、「論理的」解釈の側からみた場合、その弁証法的方法理解の難点が露呈され、また厳密な規定を要求されるようになったということに要約されよう、だがバックハウスも述べていたように、「内在的自己超越」の弁証法を志向するような表現は実際に『資本論』にも存在するのであり、この志向からマルクスの叙述を解釈していこうとするのは邪道であるともいい切れないのではないか。ホルツカンプやリッツァートの歴史的契機を直ちに導入する解釈はこの点を等閑視するものであった。「論理的」解釈の試みを無に帰することなく（したがって「内在的自己超越」的な categoria 展開がマルクスにみられることを考慮しつつ）、マルクスの弁証法的展開という理論タイプを価値形態展開との関係をも明らかにしつつ析出することはできないものか。このような要請に応える一つの試みとして最後に我々はゲーラー〔12〕（1980）の解釈を取り上げる。（なお彼の解釈の十分な紹介は本稿の紙幅ではなしうところではないので、それは別稿の課題とし、ここでは概略だけしかみられないことを予め断っておく。）

ゲーラーにおいては『批判』と『資本論』のそれぞれの商品から貨幣への展開がその方法において厳密に区別して扱われる（『要綱』は公表を意図したものではないことから考察から除外される）。そして貨幣の導出がなされるのは基本的には、『批判』では交換過程論、『資本論』では価値形態論であるとされる（〔12〕 S. 52 ff.）。『批判』では交換過程の矛盾の展開によって貨幣が導き出されていることは周知としてよいであろうが、これに対応してゲーラーは、まず『批判』では「論理的」解釈のいう「内在的自己超越」の弁証法が妥当する、だが『資本論』の価値形態展開に基づく貨幣導出については、これを別のタイプの弁証法的展開として規定しなければいけないとみなす。このように

『批判』と『資本論』のそれぞれの貨幣導出における弁証法的方法を区別されたものとして規定するところにゲーラーのユニークな点がある。では『資本論』の価値形態展開の弁証法を彼はいかにして規定するのか。

まず、形態ⅠからⅢまでの展開の課題は次のようにおさえられる。すなわちまず形態Ⅰにおいて、相対的価値形態側の商品は自らの価値を他商品の媒介によって表現し、等価形態側の商品は直接的に交換可能だという、価値表現の基本的な構造（「基本構造」と呼ばれる）が与えられ、この基本構造は形態Ⅲまでの展開において不変に保たれるという。そして形態Ⅰに対する形態Ⅲの区別は、等価形態側の商品が唯一の商品として一般の他の諸商品を直接的交換可能性の形態から排除し、他方一般の他の諸商品は相対的価値形態におかれ間接的にしか交換可能でないということにあるとされる。形態Ⅰから形態Ⅲまでの展開の課題は、このような形態Ⅲの構造の差異性を明示することにより、その一般性・社会性・現実性という性格が何に由来するかを明らかにすることにあるとされるのである。

この課題を担う価値形態展開の系列の性格はどこにあるか。ゲーラーは次のように説明する。まず形態Ⅰから形態Ⅲへの展開は、等価形態側の要素の拡大による形態Ⅰから形態Ⅱへの移行と、両側の要素の入れ替え（「逆転」と呼ばれる）による形態Ⅱから形態Ⅲへの移行というそれ自体は形式的な操作によってなされる。このとき系列の必然性は、この系列が一般的等価物という展開の目標に制約されて選取りられたという点にある。すなわち、「その思惟必然性は、拡大と逆転の他の順列や組み合わせが一般的等価物に到達しないということとでしかない——かかる事態〔他の順列や組み合わせ……引用者〕の存立が思考可能なだけでなく、それが実際にも選取りられた諸構造と並んで全く同じように存立しているということは、マルクス自身が諸価値形態において指示したところである。しかしまさに展開に対して重要でないものとして、脇にのけたあるいは退けたのである」（〔12〕S.144）、というのがゲーラーの主張である。

このような価値形態展開の系列の性格をゲーラーは「発生的再構成」と名づける。では「発生的再構成」のどこに弁証法的なものがみられるのか。この点についての説明は、『批判』における貨幣導出に関する彼の解釈（〔12〕S.87ff.）を前提としている。それによると、『批判』では交換過程の展開の中に価値形態展開が含み込まれていた、つまり価値形態展開は交換過程の矛盾の価値側

面、すなわち価値としての等置の関係（〔2〕 S. 30）の展開としてなされていたというのである。ところがゲーラーによれば、マルクスは『批判』では交換過程の矛盾を展開させることにより、直接交換から間接交換 $W-G-W$ への移行を説こうとしていた、しかしその試みは失敗し交換過程の展開のうちなされたのはその一契機にすぎない（貨幣に相応した交換過程の構造すなわち $W-G-W$ は展開されていないのだから）価値形態展開による貨幣導出のみに留まったという。そこで、不明瞭さを排除すべく『資本論』では価値形態展開を交換過程から独立に展開するようになり、交換過程の矛盾はいまや貨幣の導出を担わなくなったというのである。この経過からゲーラーは、『資本論』の価値形態展開は交換過程の展開に包摂されていないとはいえ、相変わらず交換過程の一契機の展開であることには変わりがないものとみなす。だから、そこには『批判』の交換過程論にみられた「内在的自己超越」の弁証法の痕跡がみられるし、また価値形態論において一般的等価物が展開された後にそれとの関連で交換過程論で矛盾が扱われることにもなるというのである。このような全体の連関（ここでは交換過程）を絶えず考慮しつつなされ、それ故形式論理を犯す矛盾もまた直接ではないにせよ定式化される理論タイプであるが故にゲーラーはこれを形式論理的な科学的説明のタイプと異なったマルクス独自の理論タイプとして把握する（〔12〕 S. 155 ff.）。

かくしてゲーラーにおいては価値形態展開の性格と、「論理的」解釈の理解における弁証法的方法すなわち「内在的自己超越」という言葉でいい表されていたものとの関係が、『批判』と『資本論』との貨幣導出の方法の厳密な区別を踏まえることによって一つの一貫した説明を与えられたといつてよいであろう。ゲーラーはこの関係を「（強調的な）弁証法の縮減」というテーゼによって要約している（〔12〕 S. 24； S. 160 ff.）。すなわち、『批判』では「内在的自己超越」という志向を有する弁証法のタイプ——彼はこれを「強調的な弁証法」と呼ぶ——がみられたのに対し、『資本論』ではそれがみられなくなり、したがって『批判』と『資本論』の間には「強調的な弁証法」の縮減がみられるという。そして『資本論』の価値形態展開の理論タイプは「強調的な弁証法」を痕跡として含む「縮減された弁証法」と呼ばれ、ゲーラーはこれを『批判』の交換過程論の「強調的な弁証法」の中に伏在していたマルクス弁証法の合理的な部分として評価するのである（〔12〕 S. 168 ff.）。

## V. 結びにかえて

1970年代西ドイツの価値形態論論争を振り返ったとき、当初の「論理的」解釈内部の議論においては、価値形態論と交換過程論の領域に関する内容上の理解が追求されたものの、「論理的」解釈への批判という形での論争の展開をみていくなれば、論議の中心はむしろマルクスの弁証法的展開という理論タイプの探求にあることがわかる<sup>(14)</sup>。この点が西ドイツの価値形態論論争の特色をなすのであり、個々の子細な論点では我が国の議論に比してなお未熟なものがみられるにもかかわらず、我々の興味をひくのである。価値形態展開と弁証法的方法の関係はいかなるものであるか、また単なる表現上の技巧以上の弁証法的叙述の意義はどこにあるのか、こうした点が論争の中で問題の焦点として浮かび上がってきた。このような論争の帰結からみた場合、まず「論理的」解釈の功績は、なによりもマルクスの弁証法的方法の重要性に光をあてたことにある。本稿では「論理的一歴史的」解釈が唯一の正統的な『資本論』解釈の流れとしてあった状況において「論理的」解釈が登場してくる事情には焦点をあてなかったが、それはマルクスの弁証法的方法の探求をめぐる議論としては、「論理的」解釈の試みが論争の出発点をなすと考えたからである。その際興味深いのは、彼らが——自らはマルクスの唯一の弁証法的方法だと解釈する——「内在的自己超越」によるカテゴリー展開という側面のマルクスにおける存在を析出しその視点をマルクスの諸叙述の解釈に徹底的に貫いてみせた点である。確かにそのような側面がマルクスにあることは否定しえないのであり、この側面からマルクスの弁証法的展開を一義的に規定していこうと試みることにより、「論理的」解釈は却って（そのような理解の枠組を逸脱する）価値形態展開の理論タイプの特殊な性格を浮き立たせ、またそれにより上の問題を深刻なものたらしめたのである。だが、バックハウスの自己批判においてみたように、価値形態展開の理論タイプを「内在的自己超越」の弁証法との関連で規定することに「論理的」解釈の論者は成功せず、また彼らの理解する弁証法的方法に関して明晰な説明を与えることにも結局未着手であった。

このような「論理的」解釈の展開とその行き詰まりという1970年代の論争の帰結を打破する一つの試みがゲラーの解釈であった。彼においては、価値形態展開が「発生的再構成」として規定を与えられ、それがマルクスの弁証法的展開の合理的部分を体現するものとして説明されたのである。我が国の議論

に照らして、ゲーラーが、価値形態展開をあくまで「内在的自己超越」として性格づけしようとする「論理的」解釈に対し、それを形式論理的基準を満たす「発生的再構成」として規定するやり方は、見田氏が「カテゴリーの自己展開説」に反対して価値形態展開が「完全に分析に帰着する合理的な過程」〔27〕p 181〕であることを強調するのに比肩しうるものであろう。だが、それ以上にゲーラーのユニークな点は、(『資本論』の価値形態展開における)「発生的再構成」という理論タイプの成立が、『批判』の交換過程展開においてマルクスが「内在的自己超越」の弁証法を貫こうとしてそれに失敗した結果として捉えられる点である。これは、マルクス自身においても当初(『批判』まで)は概念の自己運動的な弁証法的展開の方法が採用されていた——この点を明らかにしたことをゲーラーは「論理的」解釈の成果とみなす〔12〕S. 15 ff.〕——が、それが『資本論』で放棄されていたという理解であり、したがってマルクスにおいて弁証法的方法の合理的な部分が析出されていく過程について一つの新しい視点を提供<sup>(15)</sup>するものと思われるのであり、我々は既に我が国で提出されている彼への批判をも<sup>(16)</sup>勘案しながら稿を改めてこれを検討に付す必要があると考えている。

西ドイツの議論の流れに照らしてみるとき、ゲーラーが価値形態展開を「内在的自己超越」の弁証法および形式論理的基準の両者との関連でともかくも性格規定したことは、「論理的」解釈の困難を解決する一応の方向を示したものとして意義をもつということは既に述べた。ではこのことを可能にしたのは何かというと、それは、「論理的」解釈の解釈枠組——弁証法的方法に関する「内在的自己超越」という性格規定と「二層モデル」とに要約される——の放棄と、「弁証法の縮減」という新しい解釈枠組の採用である。したがって議論の背後にはマルクスの弁証法的展開という理論タイプの独自性をどこにみい出すかについての理解の差異が横たわっている。ここに、西ドイツの価値形態論論争が、価値形態論解釈という形でまさにマルクスの弁証法的展開の性格如何という問題を問うてきたことが示されている。そしてこの問題提起は今後の論争——それが続くとすれば——でも避けて通ることのできないものであろうし、この点に関し実り多い議論を期待しうるのである。またさらに本稿では取り上げなかったが、西ドイツでは、他の科学的説明のタイプとの関連においてマルクスの弁証法的方法の意義を探ろうという問題意識に立つ研究も進められ

ており、<sup>(17)</sup>この動向をも合わせて考えた場合、広く社会科学一般へのマルクス弁証法の応用可能性が探求されていくことも期待される。この作業はマルクス弁証法の独自のかつ合理的な部分の明確な定式化を前提するのであり、そしてこれこそ価値形態論をめぐる論議が要求してきたところのものである。こうして西ドイツの価値形態論論争はその問題提起により社会科学方法論への志向をもつものであるが、このことは我が国の価値形態論研究に対しても議論の一方向を指し示すものとして示唆するところ大であると思われる。

(注)

- (1) 佐藤[25]におけるバックハウス論文[7]の紹介を参照されたい。
- (2) ローゼンターリ[28]下, p 397 以降参照。
- (3) したがって本稿では、「論理的」解釈とそれをめぐる議論において価値形態論が中心的に取り上げられたのと相まって現れた価値形態論を論じたいいくつかの注目すべき論稿, すなわちベッカー[8], クラウゼ[14], ランゲ[15]などを取り上げることはできない。
- (4) この点を方法論的に明確化したのは見田氏である。見田[27]p 150 以降を参照のこと。氏はそこで、価値形態論を例にとりつつ、そこでの弁証法的方法が「科学の唯一の用具である分析、総合」([27]p151) に帰着することを論じている。
- (5) 同学派は従来より「批判理論」の旗印のもと、既成の学問的領域区分を超えた理論的営為を追求してきたのであるが、その重心はブルジョア文化批判におかれ、マルクスがブルジョア社会の批判の基礎とみなした経済学批判には未着手であった。このことを上の研究者たちは、同学派の欠陥として意識していた。特に、1960年代に華々しく展開された、いわゆるドイツ社会学における実証主義論争(この論争を集大成したのが[5]である)の中で、しばしば同学派の諸論者は、ポパーら批判的合理主義が批判の領域を日常生活連関から切り離された科学の世界に限定した点を批判し、それに対置して社会的総体への批判——ないし、科学的研究の中で取り扱われている事態(Sache)に刻印されている社会的総体性への批判——という課題を強調したが、しかしその具体的実行には着手していなかった。バックハウス、ライヒェルトはそのための手掛かりとして、ブルジョア社会の日常意識の転倒性への批判としてのマルクスの経済学批判の意義に注目したのだといえよう。この事情については、[18]に付されたI. Fetserの序文を参照されたい。
- (6) 先駆的業績としてシュミット[22](初版1962)がある。
- (7) このような試みとしてはⅡで取り上げるものの他に、プリנקマン[10](1975)、経済学批判のためのプロジェクトグループ[17](1973)等がある。これらは西ドイツにおいて「論理的」解釈が一つの流れとして形成されてきたことを示している。
- (8) その政治的背景についてはバックハウス[7]Anm. 4を参照されたい。

- (9) リッツァート[19]は、ライヒェルト、ゼレニー、コシーク、ゴドリエの四人の所説に対する批評として書かれたものであるが、本稿では「論理的」解釈の問題点の指摘という側面から取り上げられている。また、ルーベン＝東ドイツの論理学者であるが、しばしば『資本論』の方法をめぐる西側の議論に批判的なコメントを加えている。
- (10) 例えばライヒェルトの、「商品自体の中に、資本主義全体が備わっている(an-gelegt)」([18] S. 262) という表現にはこのような志向がみられる。
- (11) これは例えば、形態Ⅲの必然性は「交換過程に現れる商品の増大する数と多様性」([4] S. 105) とともに増大する、といわれる場合である。
- (12) [7] S. 55 ff. 参照。
- (13) これは例えば、「個別的な価値形態はおのずから(von selbst) もっと完全な形態に移行する」([4] S. 76) という文言である。
- (14) 我が国でこのような方向での研究を推し進めたのはいうまでもなく見田氏であるが、西ドイツの議論ではこのような研究の要請が様々な立場に立つ論者の間での論争から提示されてきたこと、およびマルクスの諸テキスト間の関係如何という問題と絡みあって議論が展開したことが特徴をなすのであり、このような事情を背景とすることによってまたゲーラーのユニークな視点(後述)も現れてくるのである。
- (15) 武田氏は、ゲーラー説に注目しつつも、ゲーラーが価値形態展開においては矛盾展開がみられないということを根拠に『資本論』におけるヘーゲルのマルクスへの影響の弱化を主張している点を批判している([26] p 219以降参照)。氏によれば、マルクスにおいて価値形態展開を促す「矛盾の内容について明示的な定式化がなく、矛盾という言葉さえ欠けていたとしても」([26] p 218)、それだけでは価値形態展開が矛盾の展開に担われていないとしてしまうことはできない。なぜなら、「マルクスは欠陥規定という形で事実上価値概念とその定在様式との矛盾を摘出し、この矛盾の展開として価値形態の発展を把握していた」(同上)からだというのである。ゲーラーにおいてこのような側面が等閑視されるのは、彼が価値形態を交換過程の構造との関連でだけ考察し、価値概念との関連を明らかにしていないことによるものと思われる。西ドイツにおけるゲーラー説の評価を筆者は未だ知りえていないが、東側からの批判にはシュティラー[24]がある。彼の批判は「弁証法は研究と叙述の一般的方向を示しはするが、分析の進行を詳細において指図するものではない」([24] S. 146) という一般的なものにとどまっており、西ドイツの従来の議論に照らした内面的な批判になっていないように思われる。
- (16) ゲーラーのユニークな視点は、『批判』におけるマルクスの失敗、あるいは『資本論』の交換過程論における貨幣導出の役割の著しい減退という解釈に支えられておりこれらの点は、『批判』の交換過程論一本での貨幣導出をマルクスが放棄した理由について形成史上の示唆を与えるのみならず、価値形態論と交換過程論の役割についての我が国の議論に対しても再考を促すものと思われるのであり、我々はそれを別稿において検討したいと考えている。
- (17) 商品から貨幣への展開を扱ったこのような試みとして、スニードの理論タイプ

がマルクスの叙述に妥当とするディードリッヒ(11), 因果一法則論的理論タイプとマルクスの弁証法的展開の類縁性を主張するシュタインフォルツ(23)を挙げておこう。

#### 参考文献

- [1] Marx, K.: Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie. Berlin 1953. (高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』I～V, 大月書店, 1958～1965年)
- [2] Marx, K.: Zur Kritik der politischen Ökonomie. MEW Bd. 13. Berlin 1961. (杉本俊朗訳『経済学批判』, 国民文庫, 1966年)
- [3] Marx, K.: Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie. Bd. I. Erste Auflage. Hamburg 1867. (岡崎次郎訳『資本論第一巻初版』, 国民文庫, 1976年)
- [4] Marx, K.: Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie. Bd. I. MEW 23. Berlin 1962. (岡崎次郎訳『資本論』第一分冊, 国民文庫, 1972年)
- [5] Adorno, Th. W. u. a.: Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie. Darmstadt u. a. 1972. (城塚登他訳『社会科学の論理』, 河出書房新社, 1979年)
- [6] Backhaus, H. — G.: Zur Dialektik der Wertform. In: Beiträge zur marxistischen Erkenntnistheorie. (Hg.) A. Schmidt. Frankfurt/M 1969. (花崎皋平・青山政雄訳『現代マルクス主義認識論』, 河出書房新社, 1973年)
- [7] Backhaus, H. — G.: Materialien zur Rekonstruktion der Marxschen Wertlehre 3. In: Gesellschaft. Beiträge zur Marxschen Theorie II. 1978.
- [8] Becker, W.: Kritik der Marxschen Wertlehre. Hamburg 1972.
- [9] Bishoff, J.: Gesellschaftliche Arbeit des Systembegriff. Berlin (W) 1973.
- [10] Brinkmann, H.: Die Ware. Gießen 1975.
- [11] Diederich, W.: A Structuralist Reconstruction of Marx's Economics. In: Philosophy of Economics. (Ed.) W. Stegmüller/W. Balzar/W. Spohn. Berlin (W) u. a. 1982.
- [12] Göhler, G.: Die Reduktion der Dialektik durch Marx. Strukturveränderungen der dialektischen Entwicklung in der Kritik der politischen Ökonomie. Stuttgart 1980.
- [13] Holzkamp, K.: Die historische Methode des wissenschaftlichen Sozialismus und ihre Verkenntung durch J. Bishoff. In: Das Argument. 16 Jg/1974. Heft 1/2.
- [14] Krause, U.: Geld und abstrakte Arbeit. Frankfurt/M u. a. 1979. (高須賀義博監訳『貨幣と抽象的労働』三和書房, 1985年)

- [15] Lange, E. M.: Wertformanalyse. In: Neue Hefte für Philosophie. Ht. 13. 1978.
- [16] Projektgruppe Entwicklung des Marxschen Systems: Das Kapitels vom Geld. Berlin (W) 1973.
- [17] Projektgruppe zur Kritik der politischen Ökonomie: Zur Logik des Kapitals. Berlin (W)<sup>2</sup> 1973.
- [18] Reichelt, H.: Zur logischen Struktur des Kapitalbegriffs bei Karl Marx. Frankfurt/M 1970.
- [19] Ritsert, J.: Probleme politisch-ökonomischer Theoriebildung. Frankfurt/M 1973.
- [20] Rosdolsky, R.: Zur Entwicklungsgeschichte des Marxschen "Kapital". Frankfurt/M u. a. 1968. (時永他訳『資本論成立史 1』, 法政大学出版局, 1973 年)
- [21] Ruben, P.: Über Methodologie und Weltanschauung der Kapitallogik. In: Sozialistische Politik 42. 9 (1977)
- [22] Schmidt, A.: Der Begriff der Natur in der Lehre von Marx. Frankfurt/M 1971 (Neuauflage) (元浜清海訳『マルクスの自然概念』, 法政大学出版局, 1972 年)
- [23] Steinvorth, U.: Eine analytische Interpretation der Marxschen Dialektik. Meisenheim/G. 1977.
- [24] Stiehler, G.: Die Einheit von Materialismus und Dialektik in der Philosophie von Karl Marx. In: Deutsche Zeitschrift für Philosophie. 2 / 31 Jg. (1983)
- [25] 佐藤金三郎『『資本論』研究の現状と展望』『経済セミナー』1979 年 4 月号。
- [26] 武田信照『価値形態と貨幣』, 梓出版社, 1982 年。
- [27] 見田石介『『資本論』の方法』『見田石介著作集第四巻』, 大月書店, 1978 年。
- [28] ローゼンタール, M. M.『資本論の弁証法』上・下(飯田貫一訳, 青木書店, 1956・1957 年)  
(筆者の住所: 〒330 大宮市土呂町 1-20-7 にしき荘10号室)